

こどもサポーター（こころ支援）認証講座

【講座の趣旨】

2009年度及び2010年度に実施した、不登校や引きこもりをテーマとした「学校支援サポーター」講座の認証講座として「こどもサポーター（こころ支援）」が名称化され、一般社団法人教育支援人材認証協会下の初めての講座となりました。不登校や引きこもりの現状と課題、そしてどのように取り組んだらよいのか、学校支援や地域支援の立場でサポートできる人材を養成することが狙いです。

【講座の内容と開催時期・担当者】

不登校や引きこもりが大きな問題になって子どもや青年たちのこころが見えないといわれてから久しくなります。制度的にはいくつか改善がなされてきましたが、状況は悪化するばかりです。近年は仕事を途中でやめてしまって引きこもる大人たちも増えています。こうした心の問題をどのようにとらえたらいいのかといった問題意識のもと、今回の講座では子どもをめぐる状況と子どもや青年の心の理解、そして不登校や引きこもりの現状と対策について専門的な立場から企画しました。

第1日 こどもサポーター（こころ支援）講座①

2月9日（月）	講座領域	講座内容
講座Ⅰ 10:30～12:00	認証制度について及び支援者論	教育支援人材認証とは何か、支援者は何をしなければならないか等
講 師	瀧口 優	白梅学園短期大学
講座Ⅱ 13:00～14:30	こども・青年のこころの理解	こどもや青年のこころはどのように発達し、現実社会の中でどのような影響を受けているのか
講 師	小保方晶子	白梅学園大学
講座Ⅲ 14:40～16:10	「こどもサポーター（こころ支援）」における支援のあり方	不登校や引きこもりのこどもや青年に対してどのような支援が求められているのか
講 師	瀧口 優	白梅学園短期大学

第2日 こどもサポーター（こころ支援）講座②

2月10日（火）	講座領域	講座内容
講座Ⅳ 12:30～13:30	子どもの理解	こどもとは何か、こどもの発達の権利と自立のあり方について等
講 師	増田修治	白梅学園大学
講座Ⅴ 13:40～14:40	子どもを取り巻く環境の理解	少子化社会、メディア社会、多文化社会の中 にいるこどもの環境はどうなっているか等
講 師	成田弘子	白梅学園大学
講座Ⅳ (14:50～15:50)	子どもの接し方	子どもの発達と自立の理解の上になって、ど のように子どもと接していったらよいか等
講 師	成田弘子	白梅学園大学

第3日 こどもサポーター（こころ支援）講座③

2月11日（水）	講座領域	講座内容
講座Ⅴ 10:40～12:10	子ども・青年に関する社会制 度や法制度の理解	こどもや青年はどのような法律によって規定 され、また何を保護されているのか
講 師	長谷川俊雄	白梅学園大学
講座Ⅵ 13:00～14:30	不登校・ひきこもりとは何か	現代の課題となっている不登校やひきこもり はどのようなメカニズムで生じてくるのか
講 師	長谷川俊雄	白梅学園大学
講座Ⅶ (14:40～16:10)	不登校・ひきこもりへの対応	不登校やひきこもりに対して社会や大人はど のように対応すればよいのか
講 師	長谷川俊雄	白梅学園大学

【感想】

筆者は第3日目の3つの講座を担当しました。受講生のみなさんは熱心に聴講されていました。社会常識化している不登校・ひきこもりの理解に新たな視点からの解釈を加え、私たちが常識的に支援することは、実は子どもや若者を排除したり傷つけたりする可能性があることを不登校・ひきこもり本人の声や事例紹介をとおして講義しました。社会的に少数派に位置する不登校やひきこもりの子ども・若者たちに対する支援は、多数派が持っている価値観で支援することではなく、少数派が持っている価値観を尊重した支援によって、子どもや若者たちと共感を可能とさせ、伴走することを生み出すことの大切さを強調しました。手垢にまみれた不登校観・ひきこもり観を脱構築して、本人を問題解決へと導くといった医学モデルや教育モデルではない、本人と共同して取り組む地平を切り拓くモデルに気づいていただこうに思います。結局、「こころ支援」と言っても、「こころ」と「生活」は大きな影響を相互に与えあっていることから、「こころ」の支援はカウンセリング・アプローチばかりでなく、「生活」のあり方の支援といったソーシャルワーク・アプローチの必要性についても、支援を展開する上で新たな視点として理解をいただこうに思います。

筆者の講座に限られた感想ですが、こうした講座全体を受講することによって、困難に直面した子どもや若者の理解が促進されることは、子どもや若者たちの支援が有効に機能することにつながると考えています。今回の講座の積極面をさらに生かしながら、消極面は改善を試みながら、次年度の講座へパトタッチしていきたいと思っています。

（文責：長谷川俊雄）